

コロナ禍で災害復興について考える

京都大学 防災研究所
教授 矢守克也



1. コロナ禍で考える

本稿の執筆依頼を受けるにあたって、特集テーマとして伝えられたのは「コロナ禍での復興支援とボランティア」であった。本稿は、このリクエストから1文字だけアレンジさせてもらって、コロナ禍で、復興支援とボランティアについて筆者が考えたことをもとに執筆したものである。コロナ禍で発生した災害の被災者に対する支援活動や被災地でのボランティア活動にも学んだつもりではあるが、感染症対策と被災地支援を両立させるための工夫といった実務的な内容については、筆者などよりはるかに素晴らしい書き手が多数いらっしゃるはずで、ここではそれとは別の切り口を追求してみた。

こうした立場に立ったとき、言い換えれば、今、コロナ禍にあるからこそ私たちの思考のセンターに登場してきたように思われる大切な切り口が3つほどあるように思える。第1は、「いる」ことに関する再考、第2は、「引き算」に対する「足し算」の時間の意義、第3は、復興と防災のクロスオーバーの重要性、以上3つの切り口である。

2. 「いる」ことに関する再考

(1) 「いる」の困難

コロナ禍にあって、共に「いる」ことの困難が、復興支援や災害ボランティアに大きな影響、多くの場合、ネガティブな影響をもたらしている。この問題は、だれの目にも明らかである。他方で、物理的に「いる」ことが困難であっても、「する」ことなら遠隔地からでも工夫次第で可能なことも多いこと、これもわかりやすい事実だし、現実には大きな成果もあがっている。あくまでも一例であるが、暮らしや住まいの再建に関

する重要な、しかし被災者には理解が難しい諸制度について、その筋の専門家や経験者がリモートで相談会を開催するといった事例である。また、復旧・復興とは局面を異にするが、防災・減災や地域づくりの分野でも同じことが該当すること、つまり、「いる」は困難でも「する」はある程度可能であること、場合によっては、「いる」に不自由を感じなかった時期以上のことを「する」ことができそうなことについては、多数の注目すべき実践報告があり（たとえば、近藤（2021）、筆者自身も、「リモート防災術」というタイトルで小文も書いた（矢守, 2021a）。

しかし、「いる」が著しく困難になっているコロナ禍だからこそ、復興支援や災害ボランティアに関して、これまでも鍵を握るとされてきた「いる」について（代表的な論考としては、「ただ傍に居ること」の重要性について説いた渥美（2014）など）、上で集約したよく耳にする種類の議論から歩をさらに進めて原理的に再考してみることも重要だろう。たとえば、コロナ感染症の蔓延下では「いる」ことは本当に困難なのか。逆に、今それができないと嘆いているコロナ前の「いる」はたして真正なものだったのか。そして、そもそも「いる」とはどういうことなのか。

(2) 「いる」の逆説的復権

人類学者、小説家、美学者の3人がコロナ禍での気づきをリレーエッセイの形でまとめた奥野・吉村・伊藤（2020）は、「いる」について多くの示唆を提供してくれる。彼らの議論のスタート点になっているのは、コロナ禍だからこそ、むしろ、「いる」が顕在化している—ただし独特の形で、という直観であり認識である。たしかに、一見、新型コロナウイルス感染症は「いる」を妨げている。このとき失われている「いる」と

は、生身の身体が共に「いる」ということであるが、その身体が、今や、私たちにとってお互いを殺すかもしれない爆弾と化している。それゆえ、誘爆（感染）を恐れて、みな「距離をとっている」わけである。

しかし、それだけにかえて、私たちは今、これまで目もくれなかった身体に注意を向けるようになったとも言える。同書の冒頭部分に、筆者には少々身につまされる経験が紹介されている。「私のような初老の男は、特に若者達には徹底的に無視されあたたかも風景に過ぎなかった」（奥野ら, 2020, p.11）。しかし、感染の拡がりとともに、「相手がどんな年齢であろうと誰もが他人を意識する、そして、マスクを着けているか…（中略）…体調が悪そうかなどを瞬時に見て取り…（中略）…目に言えない新型コロナウイルスが、見えていなかった他者を忽然と可視化し始めた」（奥野ら, 2020, p.11）。

また、对人的な接触を避けてネット注文した食材が宅配便で自宅に届いたとき、その食材がどこでだれによって生産され、どのようにここまで配達されてきたのかと想像してしまうといった経験も日常茶飯事となった（バトラー, 2020）。「ウイルスは、感染という仕方で、地球規模の接触のネットワークを可視化して見せたのだ」（奥野ら, 2020, p.167）。コロナ禍だからこそ、私たちの前に姿を現した身体たちが、たしかに「いる」！

現代社会は、身体から物質性をそぎ落とし、情報性に還元する（非物質化する）方向で社会を急速に変質させてきた。高度情報化社会やその最も直接的な体现であるインターネットは、上述の通り、災害に関わる領域でも、「リモート」を冠したさまざまな活動（「リモート相談会」、「リモート防災訓練」など）の基盤となって、たしかに、一方ではコロナ禍での災害復興や防災・減災を支えている。しかし他方では、「いる」を「リモート」で非物質的に補完する営みには、「いる」の意義や必要性を、逆にその根底から食い破ってしまう性質がある。「いる」がリモートで簡単に代用できるのなら、「いる」自体の価値が低下していくの

は自然の道理である。この点には重々注意が必要だろう。

（3）「いる」の集合的否認を超えて

本節の最後に、一点注記しておきたい。先に、路上でたまたますれ違う人にすら「いる」を感じるコロナ禍が、ある意味で「いる」の復権につながっていると論じた。この主張に対して、それは、身体的安全というきわめて限定されたアспектからだけ他者を見る態度であって、本来の「いる」の再生とはほど遠いのではないかとの反論が—「いる」ことに「気遣い」、「思いやり」といった要素を自動的に込める考えに立つ方々から—寄せられそうな気がする。この疑念に対しては、「それは、たしかにそうだ」といったん受け入れた上で、ただし、先述の「風景に過ぎなかった」が示すように、物理的な共在があることだけでは、最低限の「いる」すら意識されないこともあるのだから、コロナウイルスが可視化した物質的でミニマムな「いる」をひとまずはリスペクトし、むしろ積極的に活用すべきではないか、と再提起しておくことができると思われる。

このことの意味は、近年の被災地における「集合的否認」という深刻な課題（宮本, 2019）に目を向けてみるとよくわかる。「集合的否認」とは、支援体制が混乱しているとか、ボランティアの方式がどうかといった問題以前の問題、つまり、支援を必要としている被災者がそもそも見えていないという問題である。これは、とりも直さず、被災者が「いる」こと自体が集合的に否認されている（いないことにされている）という由々しき問題である。宮本（2019）が分析対象にしているのは、もちろん、新型コロナ感染症蔓延前の被災地である。だから、潜在的な支援者（支援しようと思えばそうできる人たち）も、また被災者も、物理的には同じ空間に共在している。にもかかわらず、助けを必要としている被災者がそこに存在していること自体が「風景に過ぎない」ことにされているのである。まずは、単純な「いる」の回復も必要だと考えるゆえんである。

3. 「引き算の時間／足し算の時間」

(1) 「引き算」の破綻と「足し算」のすすめ

この印象的なフレーズも、奥野ら（2020）から援用したものである。もっとも、筆者自身、このフレーズとともに議論されているのと同じことを、これまで、「インストゥルメンタル／コンサマトリー」という2つのタイプの時間を対比させることで繰り返し指摘してきたので（矢守, 2018; 2019）、これらの論考も併せて参照していただければ幸いである。

「引き算の時間」にはいくつかの具体的な現象形態があるが、一番わかりやすいのは、フォーワードな、言い換えれば、未来を向いた引き算である（反対のバックワードな引き算については後述する）。広い意味で目的志向的な活動にあたる時、私たちは「引き算の時間」、別言すれば、インストゥルメンタルな時間（媒介・手段的な時間）に支配されている。この宿題はゴールデンウィーク明けの月曜日までに片付けねばならないと思うとき、あるいは、卒業後はあの会社に就職したいなどと目標を立て、その準備に励むとき、私たちは締め切りや将来の夢というゴールからの逆算に基づく「引き算の時間」を生きている。

ちなみに、防災・減災の活動も、「引き算の時間」の典型とも言える構造をもっている。30年後に70パーセントの確率で生じると想定された巨大災害を究極のゴールとし、また、そこから引き出された下位目標群（たとえば、「1年以内に町内の災害時要支援者の個別避難計画を全員分作成！」）をサブゴールとした上で、ゴールを起点とする「引き算の時間」の中で日々活動が展開されているからである。

これに対して、「足し算の時間」とは、コロナ禍が引き起こした「引き算」の破綻・不能によって否応なくもたらされた、より積極的に言えば、その存在を私たちが再認識したところの時間のありよう、である（奥野ら, 2020）。「東京オリンピック・パラリンピックという、ほんの半年前まであらゆることの逆算の起点になっていた未来は霧の中だ。政策も補償もワクチン開発も先の見えない日々の中で、小さな計画にさえ

『実現できるかどうかわかりませんが』という但し書きがつく」（奥野ら, 2020, pp.16-17）。こうなると、今（だけ）をじっと見つめて、今できることを深く味わいつつ、そうした時間を少しずつ積み重ねて足し算で生きていく他ないというわけである。

(2) 「足し算の時間」の下での復興

この意味での「足し算の時間」、言い換えれば、コンサマトリーな時間（直接・享受的な時間）の重要性に、一コロナ禍という事情とは別に一同書の著者が認知症患者との関わりの中で気づいたという点も重要だ。そうした体調の変化の激しい人にとっては、たとえ明日のことであっても未来予測はむずかしく、それが「足し算の時間」という時間の大切さに著者が気づくきっかけになったというのだ。

これと同じことは、程度の差こそあれ、災害の被災者にもあてはまる。突然の被災による生活の激変によって、それまでの日常、言い換えれば、被災以前には頼りにすることができた「引き算の時間」が、すべてあるいは部分的に崩壊してしまうことこそが、被災の本質だからである。そういった人びとに対する支援においては、「引き算の時間」の回復もしくは再設定のお手伝い—宮本（2015）の言う「めざす」に相当—だけではなく、「足し算の時間」の共有—宮本（2015）の言う「すごす」に相当—がたしかに必要なになるだろう。

また、渥美（2010）が、先行の災害の被災者から後発した別の災害の被災者へと贈られた印象的なメッセージとして紹介している「焦らないでください」や、大流行の「ビルド・バック・ベター」に対する批判的眼差し（たとえば、矢守（2020a; 2020b）も、災害復興の領域に慎重な配慮なく無粋な形で持ちこまれる「引き算の時間」に対する警鐘と位置づけることができる。なぜなら、それらは、バックワードな、言い換えれば、いったん過去を向き直った上でなされる「引き算の時間」—「あの日から半年、1年、5年、どこまで戻ったか検証を」、「あれからもう10年も経ったのだからそろそろ……」など—を被災者に

強要することに対する批判に他ならないからである。

さて、私たちの周囲には、今、おびただしい量の「ポスト・コロナの××」が溢れている。××には、「観光産業」が入ったり、「大学教育」が入ったり、「地政学」が入ったりする。こうした言説の洪水は、五里霧中のコロナ禍に、何としても「引き算の時間」を取り戻したいという、切実な、裏を返せばヒステリックな叫びのあらわれである。しかし、先の見えないコロナ禍だからこそ、あえて先を見ないで今を生きること、つまり、「引き算の時間」ではなく「足し算の時間」に立脚して暮らしを立てる魅力について再考し、そうした立場から見えてくる復興支援の新たな可能性について構想してみることも必要だろう。

4. 復興と防災のクロスオーバー

(1) 「アフター・コロナ／ビフォー・X」

昨年(2020年)、新型コロナウイルス感染症が社会に拡大する中、筆者は、「アフター・コロナ／ビフォー・X」と題する論考を書いた(矢守, 2020c)。その趣旨はこうだ。私たちは、今、「アフター・コロナ」、「ウィズ・コロナ」と騒いでいるが、本当に大事なことは、「ビフォー・コロナ」の方に隠れている。なぜなら、そのときしなかったことや逆にやってしまったことが、今コロナ禍を生んでいるからである。そうだとすれば、こうも考えられる。たしかに今は「ウィズ・コロナ」であるが、同時に、この今は、潜在的な何らかの脅威Xに対する「ビフォー・X」にすでになっているはずである。その脅威Xと、「ビフォー・X」のうちに正面から対峙することこそが、真に「コロナに学ぶ」ということである。

「アフター・コロナ／ビフォー・X」について考えて、あらためて筆者の念頭に浮かんだ論点がある。それが、「アフター・東日本(あるいは、阪神・淡路、熊本などの災害)」と「ビフォー・X」というペアである。たとえば、今年(2021年)は、「10年アフター東日本」であり、「5年アフター熊本」である。こうした周年を迎える被災地からしばしば聞こえ

てくるのが、「風化させてはならない」、「二度と同じことを繰り返してはならない」、「伝えること、それが自分たちの使命・責任だ」といった言葉である。これらの言葉は、「アフター・東日本(または、阪神・淡路、熊本)」というエレメントと、それらの災害の回復としてのXを念頭においた「ビフォー・X」というエレメントとが合成されて生み出されている。「私たちは、東日本大震災を経験した。だからこそ、来たるべきXへ向けて、その経験を伝えていくことが自分たちの使命・責任だ」というわけである。

(2) 「使命・責任」

「使命・責任」という理解が、決して大仰なものではなく、また例外的でもなく、多くの被災者に広範に分けもたれているという事実、また同時に、その使命・責任が果たされないとき、つまり、Xと同じ(ような)悲劇が反復されてしまったとき、被災者が心身に大きな打撃を受けるという事実が、きわめて重要である。この事実を立証するエビデンスは、たとえば、周年を画するマスメディア報道に目を配っているだけでも多数得られるが、リサーチサイドに寄ったものを少しピックアップするだけでも、東日本大震災について相川・松井(2016)、阪神・淡路大震災について樽川(2007)や矢守(2010)、熊本地震について矢守(2021b)など、多数存在する。

さらに、筆者が直接見聞した出来事でだめを押しておくならば、以下のような事例を紹介することができる。筆者が20年以上活動を共にしている阪神・淡路大震災の語り部グループのメンバーの一人(女性)は、震災で当時11歳の娘さんを亡くした。彼女は、地震発生から数週間して、当時は少なくとも広く人口に膾炙した言葉ではなかった「クラッシュ症候群」が悪化して命を落とした。この女性が「心から安堵した」と語ってくれたのが、大震災からちょうど10年後、2005年に発生したJR福知山線脱線事故の発生現場で、一十分とは言えなかったとしても、「クラッシュ症候群」を意識した救出・救援活動が行われたという事実を知らされたときであった。もう一つ、あるテ

レビ番組でご一緒した東日本大震災の被災者の最近の言葉も、筆者にはきわめて印象深いものだった。(最近の災害事例で)「多くの人が逃げていないというニュースや現実を目の前にするたびに、胸が張り裂けそうになる。私たちの経験はいったい何のためだったのかと」。

ここには、すでに起きた災害の被災者の心身の回復や生活復興という主題と、幸いにもまだ起きていない災害に対する備えや防災という主題とのクロスオーバー(矢守, 2021c)、この重要なポイントを見とることができる。これら 2 つの主題は、これまで、ややもすると相互に連絡のないまま別々の活動として進められ、下手をすると同じリソースを食い合う対立的なものとして位置づけられることすらあった。しかし、もちろんそうではない。両者は、多くの場合、重ね合わせて相互促進することができるし、またそうあるべきである。

(3) 細部へのこだわりとサバイバルファクター

このことを立証する極端な、しかしだからこそ、説得力のある事例がある。それは、上でも言及した JR 福知山線の列車事故の被害者のその後について、長期にわたる分厚い関わりを通してレポートした力作(八木, 2019)に報告されている事例である。なお、筆者も、本書について書評論文で詳しくとりあげたことがあるので参照してほしい(矢守, 2020d)。

ヒントは、「事故検証は、専門的検討と被害者視点の交点を見つけていくプロセスを通じて、被害者が人生の再出発の入り口に立つためのものと言うこともできる」(八木, 2019, p.149)という指摘にある。特に大切なのは、事故・犯罪・災害等の被害者(負傷者、被災者、遺族)にしばしば見られるディテール(細部)へのこだわりである。「遺族はこだわる。なぜ、自分の大切な人が、この場所で事故にあってしまったのだろうか」と(同書 p.138)、「私は娘が最期に座っていた同じ座席に座ってあげたいんです。最後に握っていたであろうつり革につかまってあげたいんです」(同書 p.132)。大切な人の最後の場所、最後の声を求め

てやまない、こうした思いは、だれにでも理解できるものだ。

被害者や被災者の心身の回復に不可欠なこの種の活動やそのための支援が、事故防止や防災の実践と直結していることが肝心である。そのことは、八木(2019)や矢守(2020d)に登場する「サバイバルファクター」というワードを通して理解できる。「サバイバルファクター」とは、煎じ詰めれば、事故等の被害者が自ら、事故の再発防止策、また被害の拡大抑止策の検討作業に参画することをエッセンスとする活動である。生と死、紙一重の「線引き」のこちらとあちらを見きわめようとする被害者のエネルギー、それは、座席一つ分の違い、つり革一つ分の違いの細部にすら向かっていた。この同じエネルギーは、列車の時速 1 キロ分の違い、車両剛体の厚さの 1 ミリの違いへも向けられてしかるべきである。

言うまでもなく、これは、本来、事故防止や防災の営み、つまり、「事故調査委員会」的な組織に要請されるミッションそのものである。生死を分けた「線引き」以前に、事故発生の有無を分けた数々の「線引き」を解きほぐし、十分にあり得たはずなのに実現されることなく終わった無事故へと至る因果パスを同定し、それを未来永劫実現させ続けるための知恵を生み出すことが、「サバイバルファクター」の追求であり、事故調査委員会の役割だからだ。こうして、復興や回復という主題と備えや防災という主題とが有機的にオーバーラップする。

(4) 「境界なき災害」への挑戦

「アフター・東日本(あるいは、阪神・淡路、熊本)／ビフォー・X」の視点に立って、復興と防災とのクロスオーバーの重要性をあらためて確認した背景にも、やはりコロナ禍がある。矢守(2020e)、Yamori and Goltz(2021)で指摘したように、新型コロナウイルス感染症という災厄の大きな特徴は、境界がないこと、つまりボーダーレスだということである。

それは、空間的、時間的、そして社会的にもボーダーレスなのだが、ここでとくに重要なのは、時間的な

境界が不明瞭だという事実である。これは、コロナ禍には「引き算の時間」が通用しないといの主張(3節)のバリエーションでもある。これまで、復興論は、いいも悪いも、過去の災害からのバックワードな「引き算の時間」をベースに、つまり、その災害が「もう」起こってしまったことを前提に組み立てられてきた。同様に、防災論も、いいも悪いも、未来の災害へ向けたフォワードな「引き算の時間」をベースに、つまり、その災害が「まだ」起こっていないことを前提に組み立てられてきた。

ところが、コロナ禍という災害では、この意味での時間的ポジショニングが困難である。「もう」多くの犠牲者が出てしまっており、生活や暮らしの立て直しが急務である一方で、「まだ」やって来っていない(かもしれない)真の脅威—たとえば、より深刻な変異ウイルスの世界的蔓延—に対する備えも必要だと人びとによって認識されているからである。コロナ禍では、「引き算の時間」(インストルメンタルな時間)は、フォワード方向にもバックワード方向にも、その有効性が大幅に低下する。この事態に対するひとつの処方箋は、3節で提示したように「足し算の時間」の見直しであろう。しかし、もう一つ、本節で論じてきたように、「引き算の時間」にとどまりつつも、ここで言うバックワード(復興)とフォワード(防災)の両方向をこれまで以上に組織的に連携させて乗り切るという道も想定されるだろう。

本小文では、「コロナ禍での復興支援とボランティア」ならぬ「コロナ禍で考える災害復興」について述べてきた。このテーマには、見逃されている大切な論点がまだ多数残存しているように思う。この拙稿が、不十分ながらも呼び水となって、学会内外で広範な議論が喚起され、大胆かつ繊細な実践に結びつきかけになれば、筆者としては望外の喜びである。

参考文献

1) 相川康弘・松井 豊 (2016) 東日本大震災の被災者における使命感の構造：文献事例の内容分析 筑波大学心理学研究, 51, 23-33.

2) 渥美公秀 (2010) 災害復興過程の被災地間伝承：小千谷市塩谷集落から刈羽村への手紙 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 36, 1-18.

3) 渥美公秀 (2014) 災害ボランティア—新しい社会へのグループ・ダイナミクス 弘文堂

4) バトラー, J. (2020) 世界の表面の人間の痕跡 (清水知子訳) 現代思想, 48(10), 172-178.

5) 近藤誠司 (2021) オープンプラットフォームがもたらす社会的なつながりに関する基礎的考察—コロナ禍における教材動画制作プロジェクトのポテンシャル— 社会貢献学研究, 4(1), 21-31.

6) 宮本 匠 (2015) 災害復興における“めざす” かかわりと“すごす” かかわり—東日本大震災の復興曲線インタビューから 質的心理学研究, 14, 6-18.

7) 宮本 匠 (2019) 人口減少社会の災害復興の課題：集合的否認と両論併記 災害と共生, 3(1), 11-24.

8) 奥野克巳・吉村萬老・伊藤亜紗 (2020) ひび割れた日常—人類学・文学・美学から考える 亜紀書房

9) 樽川典子 (2007) 喪失と生存の社会学：大震災のライフ・ヒストリー 有信堂高文社

10) 八木絵香 (2019) 続・対話の場をデザインする—安全な社会をつくるために必要なこと 大阪大学出版会

11) 矢守克也 (2010) 「語り直す」—4人の震災被災者が語る現在 矢守克也「アクションリサーチ—実践する人間科学—」新曜社 pp.69-112

12) 矢守克也 (2018) アクションリサーチの〈時間〉 矢守克也「アクションリサーチ・イン・アクション—共同当事者・時間・データ」新曜社 pp.75-90.

13) 矢守克也 (2019) 〈待つ〉時間—補論：アクションリサーチの〈時間〉— 災害と共生, 2(2), 1-8.

14) 矢守克也 (2020a) 災害復興のパラダイムシフト 日本災害復興学会論文集, 15, 37-44.

15) 矢守克也 (2020b) シュリンク・シュランク・シュリンキング—縮小の「前」と「後」— 災害と共生, 4, 11-20.

16) 矢守克也 (2020c) アフター・コロナ/ビフォー・X 地区防災計画学会誌, 19, 91-96.

17) 矢守克也 (2020d) 書評論文：八木絵香「続・対話の場をデザインする」 災害と共生, 4, 143-152.

18) 矢守克也 (2020e) 「境界なき災害」—人文系自然災害科学から見たコロナ禍 自然災害科学, 39, 89-100.

19) 矢守克也 (2021a) 巻頭言：リモート防災術 地区防災計画学会誌, 20, 3-4.

20) 矢守克也 (2021b) 防災心理学入門—豪雨・地震・津波に備える— ナカニシヤ出版

21) 矢守克也 (2021c) 外なるクロスオーバー/内なるクロスオーバー (会長挨拶) 日本災害復興学会公式ホームページ [<https://f-gakkai.net/message/>] (アクセス日：2021年6月13日)

22) Yamori, K. & Goltz, J. (2021). Disasters without borders: The coronavirus pandemic, global climate change and the ascendancy of gradual onset disasters. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 18(6). [DOI: <https://doi.org/10.3390/ijerph18063299>]